

| | |
|-----------------------------------|--|
| 会議名 | 飼料イネの研究・普及に関する情報交換会 |
| 開催日時 | 平成19年3月12日(月) - 13日(火) |
| 開催場所 | さいたま新都心合同庁舎2号館5階(さいたま市中央区新都心) |
| 主催者 | (独) 農業・食品産業技術総合研究機構 畜産草地研究所 |
| 参加人数 | 約264名(農水省・大学・団体・民間等) |
| 1. 会議の概要(500-1000字程度または議事内容の資料添付) | <p>主催者の畜産草地研究所柴田正貴所長の挨拶、共催の関東農政局、全国農業普及支援協会関係者の挨拶のあと、九州大学の堀田和彦助教授のⅠ「国産飼料による畜産物ブランド戦略の動向と今後の推進方向」と題する基調講演があり、続いて農林水産省生産局畜産振興課の山内洋志課長補佐からⅡ「自給飼料増産に向けた取組について—平成19年度事業の概要とWCS用イネ農薬のポジティブリスト制への移行」と題する講演があった。</p> <p>このあと技術紹介として7つの課題について講演があり、さらに茨城、群馬、埼玉から飼料イネに関する取組の紹介があった。やや盛り沢山ではあったが、これらの講演を踏まえて、主として情報交換という観点から質問を中心として総合討論が行われた。</p> <p>Ⅰは、「食の安全・安心とブランド化」という副題が付けられていて、①消費者の畜産物への安全・安心意識は相対的に高いが、その生産物が生産されている過程で、環境負荷を軽減するような生産過程が取られているかどうかはあまり関心がない。BSE問題では安心・安全への関心が高まり、パニックが起きた時の拒絶反応は大きかったが、一応の措置が取られると、実際の消費構造には大きな変化がなくなり、生協組合員等一部の消費者のみが安全・安心に強く反応する傾向が認められる。②米国のトウモロコシは20%がバイオエタノール向けに使用され、世界の生産量は停滞し、期末在庫も大きく減少し、飼料価格の高騰が予測される状況にある。③消費者は食の安全・安心に強い関心を抱いているが、消費者に最初から明確な安全・安心に関する具体的な根拠があるわけではなく、消費者・生産者の間で価値観や選好の共有を探索することが必要である。④輸入飼料の高騰も視野に入れて、「国産飼料による畜産物ブランド化」ということになる。国産飼料給与による畜産物生産、環境負荷軽減、資源循環型農業がキーワードになるが、環境によい生産物ということへの理解はなかなか難しいものがある。⑤そのためには、通常の畜産物生産との違いを理解して貰う、付加価値をつける。消費者一般ではなく、どのような相手を対象にするか、違いをどのように分かって貰うか、ブランド化のためにはそのような事項について消費者と生産者の間で議論し、相互理解を醸成することが必要である。</p> <p>Ⅱは、平成27年度の飼料作物作付け面積110万haの目標に対して現状では約90万haである。19年度以降の飼料イネの作付けを含む耕畜連携水田活用対策の施策の概要が説明された。特徴は生産振興助成と取組面積助成をもうけたことである。また、飼料イネの農薬について、従来は、食用に供する稲用の農薬を用いていたが、食用より早期に収穫すること、稲体全てを飼料に用いることから稲発酵粗飼料用農薬として個別に登録を進めることになり、平成20年作から、使用可能になるように、ポジティブリスト制度に則した手続きを進めているとの話があった。</p> |

以下簡単に技術的課題について紹介する。

Ⅲ飼料イネ育種の成果と今後の展望（九州沖縄センター坂井真）：寒冷地向きから暖地向きまで10品種が育成され普及している。最近では茎葉収量が多く、耐倒伏性や乾物生産性に優れたリーフスター、タチアオバなどが育成されている。現在好適品種の不十分な北海道や東北部向きの品種の育成も進んでいる。耐倒伏性はかなり付いてきているが直播きの導入は進んでいない。出芽苗立ち性に問題が残されこの改善が課題である。飼料品質については、黄熟期TDN55-60%を達成しているが、子実を増やすか、茎葉で行くのか、その選択も必要である。現在試験場レベルでは収量はかなり高い水準にあるが、現地レベルでは低位にある。また、専用品種が使われていない。後者の理由としては、種子の入手困難、交雑による食用米への混入の恐れ（実際にはほとんどないが）が上げられる。

Ⅳ自走細断形飼料イネ専用収穫期の開発と性能評価（中央センター井尻勉）：従来のフレール型は収穫ロスが多く、土等の混入があり、自脱コンバイン方は切断長が長かった。そこで、細断装置と攪拌装置の付いた専用収穫機が開発され、20年度に発売される。

Ⅴロールキャリアの開発（中央センター北陸元林浩太）：ロールの運搬距離の短縮に貢献する収穫機に簡易に取り付け可能なロールキャリアを開発した。平成19年中に市販化が予定されている。

Ⅵ収穫時期に応じた最適な給与対象家畜（畜産草地研究所松山裕城）：収穫時期と稲発酵飼料の化学成分、栄養価の関係を明らかにし、泌乳牛、肥育牛、肉用繁殖牛、乾乳牛・育成牛に大別して、どの時期の飼料は、どんな牛に適しているかを概説した。

Ⅶ稲発酵粗飼料による牛肉品質の研究動向（畜産草地研究所中西直人）：肥育牛への稲発酵粗飼料の給与はβ-カロテンへの心配から躊躇されてきた。一方牛肉への付加価値を加えるため稲発酵飼料を用いてビタミンEを蓄積させる研究も進展している。前者のビタミンA制御型の肥育でも、β-カロテン含量が低ければ稲発酵粗飼料を全期間給与することは可能である。一方稲発酵粗飼料によってビタミンEが牛肉中に増加することが示され、これが抗酸化機能を有しており、貯蔵中の肉色の悪化防止や酸化臭の防止にも効果がある。

Ⅷβ-カロテン含量の簡易測定法（新潟県農業総研 関誠）：葉色値から推定式を用いて含量を推定することを提案するとともに、標準液を用いて目測で推定する方法を提案した。

Ⅸサイレージ品質の簡易判定法（畜産草地研究所蔡義民）：官能法、フリーク法、V-スコア法など、サイレージの評価法をレビューした。

続いてX、XI、XIIとして茨城、群馬、埼玉の事例が報告された。XIIの埼玉の事例はブランド「はまさり牛」の取組みで、「はまさり」とは飼料イネの品種で、これを褐毛和種に食べさせた牛肉の意で、デパートでは格付けが低いために取り上げてくれず、生協では高すぎて向かないなど、ブランド化には難しい問題があることのある実態が紹介された。

| | |
|---|--|
| <p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名</p> | <p>Ⅲに関連して育種・品種については、直播き適応性の品種の育成、出芽苗立ち性のよい品種の育成が必要であるが、これは従来捨ててきた特性であるので、過去にさかのぼって品種を見直す必要がある。また、更に高収性を望むことになるので、耐倒伏性の付与が重要になってくる。また、栽培技術の面では、従来の稲の管理とは異なってくるので、施肥管理をはじめとして、一層入念な技術指導が必要になってくる。現に、試験場技術が、現場においては実現しておらず、収量のバラツキが大きい。この対策が重要である。</p> |
| <p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p> | <p>Ⅶについて、稲発酵粗飼料は、品種・刈り取り時期・調製方法により、ビタミン類の含量の変動が大きく、脂肪交雑を追求するビタミンA制御型の肥育にも、またビタミンEを利用した高付加価値肥育まで給与可能な粗飼料であることが分かりつつあり、これを具体化させるツメが必要になってきている。</p> |
| <p>4. 今後研究開発課題選択に当たって参考にすべき事項等</p> | <p>I 及び X II (はまさり牛) はブランド化の取組についての提起であった。消費者の動向、畜産物取引をめぐる動向など複雑なものが絡み合っている。さらに事例を掘り起こし、いかに飼料イネを用いたというブランド化を切り開くか、さらなる付加価値の付与も含めて検討することは多いと思われる。今回は肉であったが、牛乳についても同様なことが求められる。</p> |
| <p>5. 会議の所感</p> | <p>稲発酵粗飼料のマニュアルはこれまでの成果を整理して、昨年作成されている。今年は、これをいかに実践するか、それにあたっての種々の問題点を情報交換し、着実に水田における稲発酵粗飼料の栽培を展開しようとするものであった。収量のバラツキが大きいことから分かるように、現場に技術をどう定着させるかが大きな課題である。作りたい種子を入手するのがまだ難しく、種子の供給体制にも問題があるように思われる。高収と倒伏をどう両立させるか、コスト低下のためには直播きは今後重要になると思われるが、まだ多くの問題が残っている。</p> <p>ブランド化それ自体はかなり困難な問題が山積しているように思われるが、その方法論を事例の集積などによって解明して行くとともに、飼料イネの付加価値をどう作って行くかも今後の課題である</p> <p>輸入飼料の不足、高騰という背景を考えると、水田での飼料栽培の必要性は今後も増すと思われるので、飼料イネに関わるこれらの諸問題を解決していくことは、わが国の畜産にとって重要な問題と考えられる。</p> |
| <p>報告書</p> | <p>太 田 顯</p> |